

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	批評に代へて：選後評
Author(s)	渡邊，格司
Citation	龍南， 2 2 9： 1 0 8 - 1 1 0
Issue date	1934-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7230">http://hdl.handle.net/2298/7230</a>
Right	

い生活を描いてゐながらとげ／＼したところジメ／＼した感じがなくて、あるゆゑとがある。かうした身近い題材を何等手法を弄せず描いてある味はひの出てゐるのに感心した。未完の作であるがスケッチ風のものとするればこれで一應まとまつてゐる。「水」はやはり早魃の農村の實際生活を書いたもので、他の作品の様に見られない現實味が豊かで素材としては心が惹かれたが、觀照の態度や文章がもう少し達者だつたらと惜しく思ふ。以上、藤村の「千曲川のスケッチ」を昔愛好した者の言葉である。

(一九三四、一一、五)

## 批評に代へて

敎授 渡邊格司

龍南の文藝が盛であるやうに聞いて居りましたが、本年の應募作品を拜見して必ずしもすつかり感心した譯ではありませんでした。幼稚なといふ感想もなかつたのですが、作者である「人」が顔を出したり引込めたりして統一がなかつたり、言葉が嫌味な生硬なものだつたり、用語の不統

一といふケレンがあつたり、お芽出度の解釋、小説に對する出鱈目な態度が見えたり、冗漫きはまる無用の長物の描寫があつて作品を損じたり、兎に角一應全部を讀み終つてからの感想は、正直なところ、あまり感心しなかつたのでした。

然し惡口ばかり言はれるのを甘受するやうな諸君ではないと思ひますが、何れを拜見しても傑作ぞろひで選ぶのに困難しました、など、御世辭を言はれたつて嬉しがるやうなお芽出度の人も居ないでせうから、極く普通に批評の様な言葉をつらねて置いて、一應は讀んで考へたといふ私の勞力の證據をお目にかけませう。然し世の中には生眞面目な人も居りますから、生徒の血と汗の結晶を茶化すとは怪しからん、と私に怒鳴つてくる人もあるかも知れません。そういう人があるかもしれないといふ蓋然性に對して迄私は武裝をしなければならぬでせうか。

兎にも角にも小説修業の道にいそしむならば、もう少し近代及び現代の作家の作品を讀んで見ることです。またそういう作品の批評にも耳を藉することです。自己の見解で簡単に片づけていゝ氣になつてゐるのは見苦しいのですか

ら。大いに斯の道に苦しむがいます。と言つても學業をすてよといふではありません。高等學校の課目位に相當な成績がとれないやうでは小説作家の世界へ飛出してあれほど競争の激しい中に立つてゆかれないでせう。

本年は戯曲の應募作品が一つもなかつた事は淋しいことでした。芝居一つない田舎のことで致方もないことです。然し戯曲を讀んで手法を覚えて習作して見ることも、小説を構成する能力を養ひはしないかと思はれます。どうも本年度の作品には小説構成の能力が甚だ不足したのを見うけました。

緑の寂寥——無用の描寫、生硬な表現、その場限りの心理描寫、などが禍して切角のプロットを料理しきれない技術が感じられました。眞面目な作品ではありませんでした。

青年——標本用の人體を説明して人間を描いたと作者は思つてゐるのかと怪しましたのは私の無理でせうか。悟性だけが働いて、悟性だけが物を言ふて居る感じですか。こゝういふ立派な筋を捉へてゐて、その點作者の頭のよさを見せて、どうしてこんな作品にとどまつたのでせうか。

遙かなるもの——また何をか言はんや、と私を嘆かしめた甘い作品です。相當に書ける腕をもつて居りながら、そして構成が相當に利いて居りながら、内容がこんなに甘ちやんでは困りますね。

嫉く——これはまた随分と筆の達者な短篇です。纏めあげた手際も老巧と思ひました。平凡なことを是丈け書けたらいいでせう。切角これだけの腕をもつて居るならば、もっと野心的な題材を取扱つて戴き度いとも思つて見ました。何だか青年らしくない作者を私は作品に感じましたがどうでせう。

家庭——判らず屋の父親をもつた子のいらした氣持を少し許り書いたものでした。讀んで見ると「小説は是から」といふ處で終つて居て一寸飽氣ないですね。尤も未完となつて居て作者は書足す氣で居るのでせう。全篇が出来上つたら存外いい作品になるやうに思ひました。こゝういふ作品は親にも子にも同情的な見方をしてはだめです。第三者として地味にひたすらに書くことです。

創傷——平凡な新聞小説の筋書のやうでした。それは平面描寫だけで何時までも二人に語らせつゝ作者が批評して

ゐたり、説明してゐたりするからです。小説は説明ぢやいけない。描かなくては。

重大なる家出——相當なテーマを捉へてゐるが、それを消化してから書かないから冗な描寫ばかり多くてつまらなくしてしまふ。引緊めて書き直して見るとよいと思ひます。二つの事件を取扱ひながら、そして自分の關係の事件が表面に、重大なる家出の主人公が裏面に居るのも可笑しいですね。

水——卓魃で困つて居る田舎のありさまを克明に書いたものです。作者の頭を透して書かないで定焦點の寫眞のやうに遠景も近景も同じ明瞭さであるのは、もしそれに徹底すればそれで味があるでせうが、この作品には混然として居るのがいけないと思ひます。最初の父からの手紙や、歸省の道中の描寫は不必要でせう。どうしても書きたいなら、歸省時主人公に語らせてもよいでせう。

お嬢さん——プテブルの令嬢の家出までの心理經過を描いたもの。作者はなかなか手の込んだ作爲や伏線を用ひて居て苦心のあとが見える。長篇のものであつたから簡単にして置きませう。さよなら。

## 選 後 感

教授 上田 英夫

詩と歌と句とを拜見した。まづ詩から。

「奇運」——いくらか概念的だが一寸面白いと思つた。最後の二行で纏まつてゐる。

「世の人は知る由もなし」——歌はれてゐる美しき樂園のやうに、この詩も生きてゐない。概念的。尤も作者の意圖はわかるが。

「恒さん」——これも面白いが、少しだらだらしてゐる。も一つひきしめる必要がある。これでは詩が怪しい。

だが、この作者は慥かにいいところを持つてはゐる。

「秋の道」——散文詩だが少し調子が低い。もう少し弾まなくては。

「病床」——少々たごたいひ過ぎてあるので作者の心象がはつきりして來ない憾みがある。

「秋の散策」——少しひきしまり方が弱い憾みはあるが、氣持のうしろ一篇だ。